

後期高齢者の自伝的記憶におけるバンブと記憶内容

田中京子¹⁾・原口雅浩²⁾・稲谷ふみ枝²⁾

要 約

本研究では、後期高齢者の自伝的記憶の特徴を、中年群 ($M=57.7$, $SD=4.21$)、前期高齢群 ($M=71.6$, $SD=3.80$) および後期高齢群 ($M=80.5$, $SD=3.17$) とで比較検討した。手がかり語法により自伝的記憶を想起させ、①後期高齢者にバンブはみられるのか、②想起の型 (バンブの有無) と想起された記憶の内容の記憶主体 (自己か、他者か) の関連について調べた。その結果、後期高齢群の自伝的記憶は、中年群および前期高齢群と同様に、10代が最も想起され、後期高齢者にもバンブがみられることが明らかとなった。また、後期高齢群では10代の時期の自己が主体の記憶が想起された。

キーワード：自伝的記憶、後期高齢者、レミニセンス・バンブ

問 題

平成23年版高齢社会白書(内閣府, 2011)によると、わが国の65歳以上の高齢者人口は過去最高の2,958万人、総人口に占める65歳以上人口の割合(高齢化率)は23.1%となった。65~74歳人口(前期高齢者)は1,528万人(高齢化率11.9%)であり、75歳以上人口(後期高齢者)は1,430万人(高齢化率11.2%)であった。5人に1人が高齢者、9人に1人が75歳以上人口という本格的な高齢社会となっている。また、平均寿命は、平成21(2009)年現在、男性79.59年、女性86.44年であるが、今後、男女とも引き続き延びて、67(2055)年には、男性83.67年、女性90.34年となり、女性の平均寿命は90年を超えると見込まれている。

寿命が延び高齢期が長期化していることから、日常生活を営む際、記憶の減衰は切迫した問題の一つであり、高齢者の記憶に関する研究は老年心理学においてますます盛んになってきている(石原, 2008)。また、誕生から死までを一つの連続体としてとらえる生涯発達という考え方が提唱されており、記憶についても生涯発達の視点から変化をとらえる研究がおこなわれている(太田・多鹿, 2008)。

私たちが日常生活に用いている日常記憶の一種である自伝的記憶は、人が人生において経験した出来事の記憶であり(佐藤, 2007)、自伝的記憶には自己(self)、社会(social)、方向づけ(directive)の3つの機能がある(佐藤, 2008)。Bluck(2003)によれば、自己機能とは自己の連続性や一貫性を支え、望ましい自己像を維持する機能であり、社会機能とは対人関係の形成や維持に役立ち、コミュニケーションにプラスの影響を及ぼすものである。また、方向づけ機能はさまざまな判断や行動を方向づける機能とされている。

自伝的記憶は、認知症や逆行性健忘における時間的勾配を知る手がかりとして用いられてきた(吉益・加藤・三村・若松・斎藤・鹿島・浅井, 1998)。自伝的記憶検査や自伝的流暢検査を用いたアルツハイマー患者と健常者を対象とした研究では、特に青年期から成人前期の自伝的記憶がアイデンティティに影響を及ぼすことが示唆されている(Addis & Tippett, 2004)。このことから、自伝的記憶は自己を支える記憶であるといえる。自己に関する経験の記憶の加齢変化を明らかにすることは、自伝的記憶の生涯発達を探るうえで有意義であり、私たちがこれまで経験したことのない高齢社会に生きる後期高齢者を理解するため、また、支

1) 久留米大学心理学研究科

2) 久留米大学文学部心理学科

援するためにも必要不可欠である。

出来事を経験した年齢により、生まれてから現在までの時間軸（ライフスパン）上に布置すると、自伝的記憶の分布には3つの特徴（図1参照）があるとされている（楨, 2008）。第1の特徴は、新近性効果である。最近の出来事ほどよく想起され、現在から時間が離れるほど想起率が低下する現象であり、最近10年間の記憶の想起にあてはまる。第2の特徴は、0歳から3~4歳までの想起量が非常に乏しいという現象で、幼児期健忘という。第3の特徴として、10代から30代の出来事の想起量が多いという現象があり、この時期がコブのように見えることからレミニセンス・バンブ（reminiscence bump）（以下、バンブ）と呼ばれる。

バンブの時期の記憶には家族との思い出が多く（Elnick, Margrett, Fizgerald & Labouvie-Vief, 1999）、また、バンブ前期の10代ではアイデンティティの形成、バンブ後期の20代は配偶者や子どもとの親密な対人関係を反映していた（Holmes & Conway, 1999）。これらのことから、バンブを構成する記憶の特徴を明らかにすることは自伝的記憶を理解するうえで重要であると考えられる。

わが国の60歳以上の高齢者を対象に、手がかり語法を用いた自伝的記憶のライフスパンにおける自伝的記憶の生起分布に関する研究（楨・仲, 2006）によると、10代をピークとするバンブがみられ、記憶内容の記憶主体を分析した結果、自己が主体の記憶や自己が主体で他者も登場する記憶が多かったことが示されている。

手がかり語法とは、調査協力者に手がかり語（たとえば花）を呈示し、その手がかり語から想起される出来事やそれを経験した時期を報告させる方法である。自伝的記憶の想起手がかり語は、一般的に想起容易性の単語（以下「一般手がかり語」）が用いられている。

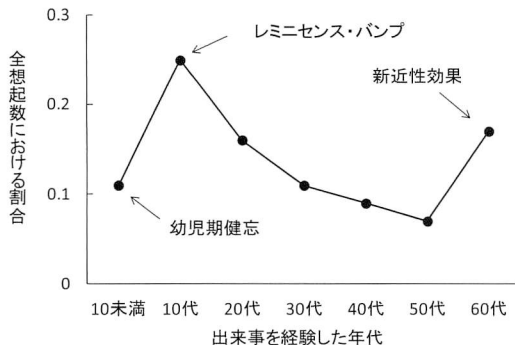


図1 自伝的記憶の生起分布の3つの特徴（楨, 2008 を一部改変）

手がかり語で自伝的記憶を想起する際、手がかり語に付随したにおいや色の感覚から記憶を想起する場合や、単語から記憶を想起し、音やかおり等の感覚を思い出す場合があり、記憶と感覚とは関連があると思われる。志村（2006）は、五感（視覚、嗅覚など）を刺激するさまざまな材料が高齢者の記憶を引き出す手がかりとなる可能性があるとして述べている。

しかしながら、においや音は主観的なものであり、実際経験したにおいや音を手がかりとして提示するのは難しい。そこで、実際においや音を用いることなく、感覚（五感）に関する単語（以下「感覚手がかり語」）で自伝的記憶を想起させることができると考え、本研究に用いる。

なお、高齢期への移行変化は高齢期の前発達段階である中年期に始まる（岡本, 1997）といわれている。また、75歳以上の高齢者は、加齢に伴い疾病の罹患率、死の確率が急速に上昇し、生活機能障害も増加する（小澤, 2009）。さらに、70歳台後半には自分が高齢者だと思ふ「高齢者自認」や年をとったと感じる「加齢認知」の割合も急増する（佐藤友光子, 2005）等の特徴がみられる。したがって、長期化している高齢期を前期（65歳以上）と後期（75歳以上）に区分した検討が必要である。中年者、前期高齢者および後期高齢者の自伝的記憶を比較検討することは、後期高齢者の自伝的記憶の生涯発達の理解のために意義があると考えられる。

そこで、本研究では、一般手がかり語と感覚手がかり語を用いて自伝的記憶を想起させ、ライフスパンにおける自伝的記憶の生起分布の特徴を中年者、前期高齢者および後期高齢者の3群で比較検討し、後期高齢者の自伝的記憶の特徴を検討した。

方 法

調査協力者

中年者と前期高齢者は、A大学の学部生と大学院生の父母または祖父母もしくはその知人に協力を求めた。その結果、50歳以上の中年者が18名（M=57.7, SD=4.21：以下、中年群）、65歳以上の前期高齢者17名（M=71.6, SD=3.80：以下、前期高齢群）が調査に参加した。また、後期高齢者は、A大学の大学院生の父母または祖父母もしくはその知人に依頼した。その結果、75歳以上の後期高齢者22名（M=80.5, SD=3.17：以下、後期高齢群）が調査に参加した。

調査期間

中年群と前期高齢群は2010年6月から8月まで、

後期高齢群は2012年2月から6月までであった。

刺激材料

中年群と前期高齢群は、一般手がかり語を13語、感覚手がかり語を11語用いた。後期高齢群は、年齢を考慮し、一般手がかり語を6個、感覚手がかり語を6個用いた(表1)。なお、感覚手がかり語の「手・肌触り」は、「手・肌ざわり」に変更した。一般手がかり語は、楨・仲(2006), Rubin, Schrauf & Greenberg(2003), 北尾・八田・石田・馬場園・近藤(1977), 小川・稲村(1974)および厳島・石原・永田・小池(1991)を参考に選定した。感覚手がかり語は、3名の学部生に、まず、視覚から思いつく言葉を自由に語らせた。次に、抽出された言葉をグループ分けし、名称を付けた。聴覚、嗅覚、味覚、触覚の順に同じ作業を繰り返し、最終的に11語を感覚手がかり語とした。

手続き

調査協力者と個別に面接を行い、手がかり語法による記憶の再生と想起内容に関する聴き取り調査を行った。

まず、調査用紙(A4判)の上部7cmの余白に記載した手がかり語を口頭で読み上げながら調査協力者ごとにランダムに呈示した。指示は、「この○○(手がかり語)という単語を見てください。生まれてから現在までの間で、○○という言葉に関して、思い出す出来事の内容を教えてください。」であった。

次に、報告された出来事の内容を調査協力者の目の前で調査用紙に記入し、その時期や年齢を尋ね、記録した。その後、内容を読み上げ、調査協力者に確認させた。

1つの手がかり語が終了した場合や何も思い出せない場合は次の手がかり語へと進み、同様の手続きを繰り返した。

なお、自伝的記憶の聴き取り調査に要した時間は、中年群が50分~90分、前期高齢群が40分~120分、後期高齢群は40分~70分であった。

倫理的配慮

調査協力者に対して、事前に口頭にて研究の趣旨を伝え、匿名性は保持されること、データを目的外に使

表1 自伝的記憶想起に用いた手がかり語

	一般手がかり語	感覚手がかり語
中年群	花, 山, 海, 木, 野菜	音, 声, 光, 色, 形, 味
前期 高齢群	13語 本, 友達, 空, 水 動物, 火, 旅行, 母	11語 音楽, におい, かおり あかり, 手・肌触り
後期 高齢群	6語 花, 海, 本 友達, 父母, 植物	6語 音, 光, 色, 味 におい, 手・肌ざわり

用しないこと、調査に対する回答を拒否できること、嫌になったらいつでも調査の参加をやめることができることを説明し、本人から書面にて調査協力の承諾を得た。また、調査内容の録音についても同様に事前に口頭で説明し、同意が得られた場合のみICレコーダーで録音した。

結 果

生起数

想起された出来事を経験した年齢により10年間隔(年代)で集計した。平均生起数は、3群の調査協力者数および手がかり語数が異なるため、1人当たり・1手がかり語当りに換算したものである。中年群、前期高齢群および後期高齢群の3群とも、一般手がかり語、感覚手がかり語とも、10代が最も想起され、10代がバンプの時期であることが示された(図2-1, 図2-2)。

想起の型(バンプの有無)による分類

想起された出来事を経験した年齢によって10代や20代といった10年間隔(年代)で集計した個人ごとの年代別生起数を用いて、K-means法によるクラスター分析(JMP8, SAS)をした結果、中年群と前期高齢群では、両手がかり語とも10代の想起が高い「10代バンプ」群と、バンプがみられない「バンプ無」群に分類された。また、後期高齢群の一般手がかり語は

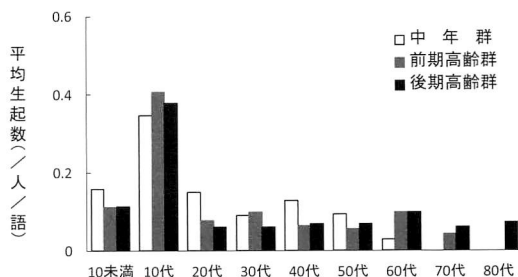


図2-1 3群の自伝的記憶生起数：一般手がかり語

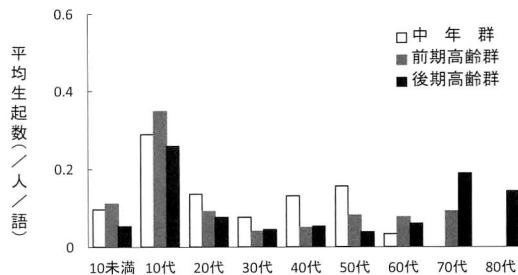


図2-2 3群の自伝的記憶生起数：感覚手がかり語

中年群や前期高齢群と同様に「10代バンプ」群と「バンプ無」群であったが、感覚手がかり語は「10代バンプ」群と、10代バンプに加え最近の記憶も想起される「10代バンプ+最近」群に分類された(図3)。

記憶主体

最初に、記憶ごとに記憶内容を榎・仲(2006)の記憶主体のカテゴリー基準(表2)により4つのカテゴリーに分類した。「自己主体」は自己が主体で自己のみが含まれる記憶、「自己・他者」は自己が主体で他者も含まれる記憶、「他者主体」は他者が主体の記憶、「シーン」は人物が登場しない記憶である。大学院生2名が独立して分類した結果、中年群の一致率は一般手がかり語が90%、感覚手がかり語が92%であり、前期高齢群の一致率は一般手がかり語が89%、感覚手がかり語が82%であった。また、後期高齢群の一致率は一般手がかり語が80%、感覚手がかり語が78%であった。一致しない項目については合議のうえ決定した。

個人ごとにカテゴリー別に記憶主体を集計し、K-means法でクラスター分析(JMP8, SAS)を行った。その結果、中年群、前期高齢群および後期高齢群の一般手がかり語では、自己主体と自己・他者が想起された「自己主体+自己・他者」と、自己・他者の想起が多い「自己・他者」に分類され、感覚手がかり語

では自己が主体の「自己主体」と自己・他者の想起が多い「自己・他者」に分類された(図4)。

想起の型(バンプの有無)と記憶主体

想起の型と記憶主体をクロス集計した結果、一般手がかり語ではバンプの有無にかかわらず、3群とも「自己主体+自己・他者」と「自己・他者」に分類された。感覚手がかり語では3群ともバンプの有無にかかわらず、「自己主体」と「自己・他者」に分類された(表3)。

考 察

本研究では、手がかり語法により想起された自伝的記憶のライフスパンにおける生起分布の特徴から、①後期高齢者にバンプはみられるのか、また、バンプの時期はいつか、②バンプの有無の観点から想起の型はどのようなパターンを示すか、③想起された記憶の内容の記憶主体は自己か、他者か、④想起の型(バンプの有無)と記憶主体の関連について、中年者、前期高齢者および後期高齢者とで比較検討した。

その結果、後期高齢者の自伝的記憶は、中年者および前期高齢者と同様に、一般手がかり語においても感覚手がかり語においても、10代が最も想起され、後期高齢者にもバンプがみられることが明らかとなった。バンプが起こる原因については、榎・仲(2006)や榎(2008)によると、認知的観点から、①出来事の新奇性による説明(10代~20代の出来事は、卒業、就職、結婚など新奇性や示差性が高く、記憶に保持されやすい)、②生物学的説明(10代、20代はヒトの認知的なパフォーマンスが最も優れている時期であるため、多くの記憶が記録、保持される)、③ライフスクリプト説

表2 記憶主体のカテゴリー分類基準: 榎・仲(2006)を参考に作成

カテゴリー	定義	例
自己主体	自己が主体で自己のみが含まれる	旅行でおいしいものを食べた。
自己・他者	自己が主体で他者も含まれる	家族と海水浴に行った。
他者主体	他者が主体	母は一生懸命働いた。
シーン	人物が登場しない	窓から見た夕日が綺麗だった。

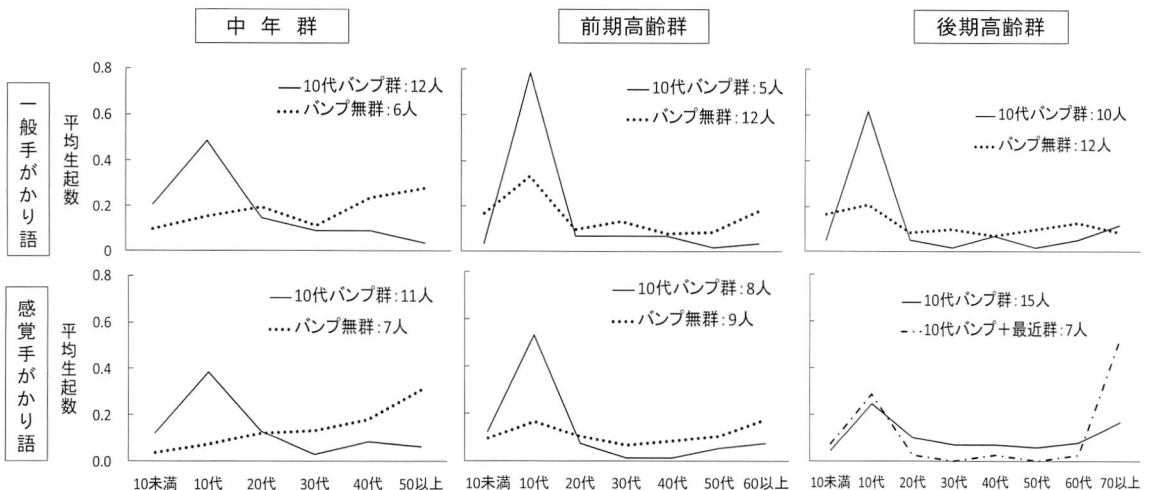


図3 想起の型(バンプの有無)による分類

(特定の移行的出来事, たとえば, 10代から30代の間に生じることが多い初めての就職や, 結婚などは文化的な共有された知識となっており, 自伝的記憶を想起するときに関与する)があり, 社会発達の観点から, ④アイデンティティ説 (アイデンティティの確立される10代から20代の出来事は優先的に保持される)がある。

いずれの説も青年期の記憶が人生における記憶の中で大きな役割を担うことを示唆している。3群の10代の時期の時代背景や生活・文化の違いがあるにもかかわらず, 同じ時期にバンプが生じたことから, バンプの時期の記憶が自伝的記憶の中核をなすとみなすことができる。

次に, 人生を10年ごとに区切った年代のどの時期がよく想起されたのか, 個人ごとに想起の型 (バンプの有無) を分析した結果, 中年群や前期高齢群では, 手がかり語にかかわらず, 10代を最も想起する型とバンプが無い型がみられた。また, 後期高齢群の一般手がかり語では, 中年群や前期高齢群と同様に10代を最も想起する型とバンプが無い型であった。一方, 後期高齢群の感覚手がかり語では, すべての調査協力者に10代にバンプがみられ, さらに一部には最近の時期も想起する新近性効果がみられた。このように, 感覚手がかり語を用いた後期高齢者の想起の型は10代をピークとするバンプのパターンを示すことが明らかとなった。

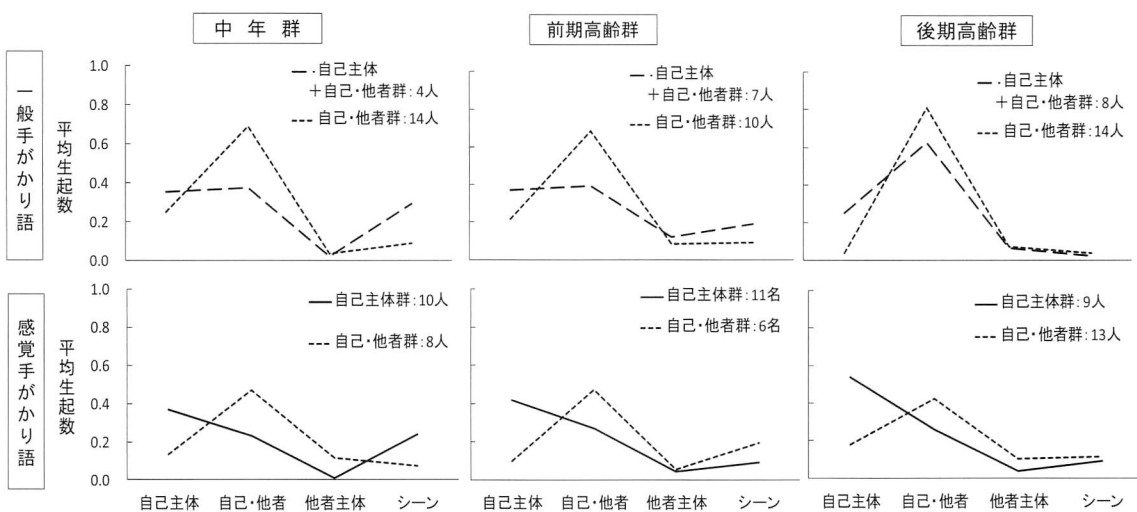


図4 記憶主体による分類

表3 想起の型(バンプの有無)と記憶主体 (単位:人)

	想起の型	一般手がかり語			感覚手がかり語			
		記憶主体			記憶主体			
		自己主体	自己主体 + 自己・他者	自己・他者	自己主体	自己主体 + 自己・他者	自己・他者	
中年群	10代バンプ	0	3	9	10代バンプ	6	0	5
	バンプ無	0	1	5	バンプ無	4	0	3
前期高齢群	10代バンプ	0	2	3	10代バンプ	5	0	3
	バンプ無	0	5	7	バンプ無	6	0	3
後期高齢群	10代バンプ	0	6	4	10代バンプ	6	0	9
	バンプ無	0	2	10	10代バンプ + 最近	3	0	4

なお、感覚手がかり語では後期高齢者に新近性効果が見られた。最も幸福な出来事を想起させるとバンブが生じるが、最もトラウマな出来事や最も悲しい出来事を想起させると、幸福な条件に比べてバンブが生じにくく、新近性効果が生じる (Berntsen & Rubin, 2002)。本研究は、手がかり語法により自伝的記憶を想起させたものであり、トラウマな出来事や悲しい出来事を想起させたものではない。しかしながら、視覚や聴覚の感覚機能は加齢に伴い低下し、感覚機能の衰えは老いを自覚させることにもつながる (長田, 2000) ことを考えると、感覚手がかり語により視力・聴力の衰えや皮膚の老化といった五感の加齢変化を意識する時期である高齢期の記憶が想起され、新近性効果が生じたと考えられる。

さらに、想起の型 (バンブの有無) と記憶主体の関連については、中年群、前期高齢群および後期高齢群の3群とも、一般手がかり語では、想起の型 (バンブの有無) が異なるにもかかわらず「自己主体+自己・他者」と「自己・他者」に、感覚手がかり語では、「自己主体」と「自己・他者」に分類され、一般手がかり語と感覚手がかり語では異なるカテゴリーに区分された。感覚手がかり語では、「自己・他者」が減少し、自己主体の記憶が増加した。さらに、後期高齢群における感覚手がかり語での想起は、10代が最も想起される「自己主体」の記憶が増加した。

これらのことから、感覚手がかり語は、自己が主体の記憶を想起させる手がかり語であるということが出来る。また、感覚は個人的で主観的なものであるため、感覚手がかり語では他者が登場しない「自己主体」の記憶が増加したとも考えられる。

しかしながら、記憶と自己は密接な関係にある。「昨年も昨日も今日も、私は他の誰でもない、私である。」—この確固たる感覚を支えるのが、自己の記憶であり (高橋・佐藤, 2008)、10代から30代の出来事が多く想起される現象であるレミニセンス・バンブもその時期の出来事が自己の確立と密接に結びついていることを示唆している (佐藤, 2008)。感覚手がかり語は自己確立の時期の出来事を想起させるものであったということもできる。

本研究は、自伝的記憶の発達の変化を検討するため世代の異なる3群で比較検討した横断的研究であった。しかしながら、第2次世界大戦や戦後の高度経済成長の経験など、異なる時代背景を考慮すると、発達の変化というより世代差の検討であったともいえる。自伝的記憶の発達の発達変化 (加齢変化) を検討するには、

同一対象者で繰り返し想起させる縦断的研究が求められる。

老年期の発達課題は自我の統合 (Erikson, Erikson & Kivnick, 1986 朝長・朝長訳 2002) であり、高齢者のバンブはEriksonの自我の発達課題と重なる (Conway & Holmes, 2004) ことから、バンブ現象と自我の統合とは関連があると考えられる。今後は、バンブの有無と記憶主体や自我の統合との関連を検討する必要がある。

引用文献

- Addis, D. R. & Tippett, L. J. (2004). Memory of myself: Autobiographical memory and identity in Alzheimer's disease. *Memory*, *12*, 56-74.
- Berntsen, D. & Rubin, D. C. (2002). Emotionally charged autobiographical memories across the life span: The recall of happy, sad, traumatic, and involuntary memories. *Psychology and Aging*, *17*, 636-652.
- Bluck, S. (2003). Autobiographical memory: Exploring its functions in everyday life. *Memory*, *11*, 113-123.
- Conway, M. A. & Holmes, A. (2004). Psychosocial stages and the accessibility of autobiographical memories across the life cycle. *Journal of Personality*, *72*, 461-480.
- Elnick, A. B., Margrett, J. A., Fitzgerald, J. M. & Labouvie-Vief, G. (1999). Benchmark memories in adulthood central domains and predictors of their frequency. *Journal of development*, *6*, 45-59.
- Erikson, E. H., Erikson, J. M., & Kivnick, H. Q. (1986). Vital involvement in old age, (エリクソン E. H.・エリクソン J. M.・キヴニック H. Q. (朝長正徳・朝長梨枝訳 2002). 老年期—生き生きしたかわりあい—みずすず書房)
- Holmes, A. & Conway, M. A. (1999). Generation identify and the reminiscence bump: Memory for public and private events. *Journal of adult development*, *6*, 21-34.
- 飯島行雄・石原治・永田優子・小池庸生 (1991). 漢字二字名詞 600 語の諸属性調査—心象性, 具象性, 学習容易性— 日本大学心理学研究, *12*, 1-19.
- 石原治 (2008). 高齢者の記憶の特徴 太田信夫・多鹿秀継 (編著) 記憶の生涯発達心理学 北大路書房.
- 北尾倫彦・八田武志・石田雅人・馬場園陽一・近藤淑子 (1977). 教育漢字 881 字の具体性, 象形性および

- 熟知性 心理学研究, 48, 105-111.
- 榎洋一 (2008). ライフスパンを通じた自伝的記憶の分布 佐藤浩一・越智啓太・下島裕美 (編著) 自伝的記憶の心理学 北大路書房.
- 榎洋一・仲真紀子 (2006). 高齢者の自伝的記憶におけるバンプと記憶内容 心理学研究, 77, 333-341.
- 内閣府 (2011). 平成 23 年版高齢社会白書 印刷通販.
- 岡本祐子 (1997). 中年からのアイデンティティ発達の心理学—成人期・老年期の心の発達と共に生きることの意味— ナカニシヤ出版.
- 小川嗣夫・稲村義貞 (1974). 言語材料の諸属性の検討—名詞の心象性, 具象性, 有意味度および学習容易性— 心理学研究, 44, 317-327.
- 太田信夫・多鹿秀継 (編著) (2008). 記憶の生涯発達 心理学 北大路書房.
- 長田久雄 (2000). 高齢者の感覚と知覚 井上勝也・木村周 (編) 新版老年心理学 朝倉書店.
- 小澤利男 (2009). 老年医学と老年学—老・病・死を考える— ライフ・サイエンス.
- Rubin, D. C., Schrauf, M. D. & Greenberg, D. L. (2003). Belief and recollection of autobiographical memories. *Memory & Cognition*, 31, 887-901.
- 佐藤浩一 (2007). 自伝的記憶の機能と想起特性 群馬大学教育学部紀要人文・社会科学編 56, 333-357.
- 佐藤浩一 (2008). 自伝的記憶の機能 佐藤浩一・越智啓太・下島裕美 (編著) 自伝的記憶の心理学 北大路書房.
- 佐藤友光子 (2005). 高齢者の年齢意識とその意味をめぐって 四国学院論集, 116, 11-42.
- 志村ゆず (編) (2006). ライフレビューブッカー—高齢者の語りの本づくり— 弘文堂.
- 高橋雅延・佐藤浩一 (2008). 「自己と記憶」の特集にあたって 高橋雅延・佐藤浩一 (編著) 心理学評論, 51, 3-7.
- 吉益晴夫・加藤元一郎・三村将・若松直樹・斎藤文恵・鹿島晴雄・浅井昌弘 (1998). 遠隔記憶の神経心理学的評価 失語症研究, 18, 205-214.

Reminiscence bump and contents of autobiographical memory in the old-old

KYOKO TANAKA (*Graduate school of Psychology, Kurume University*)

MASAHIRO HARAGUCHI (*Department of Psychology, Faculty of Literature, Kurume University*)

FUMIE INATANI (*Department of Psychology, Faculty of Literature, Kurume University*)

Abstract

This paper investigates ① whether a reminiscence bump is found in autobiographical memory in the old-old, and ② relationship between recalled pattern and the subject of the contents of memory. Participants (the middle aged ($M = 57.7$, $SD = 4.21$), the young old ($M = 71.6$, $SD = 3.80$), the old-old ($M = 80.5$, $SD = 3.17$) recalled past events using a cue-word method, described the content of each memory and dated the recalled events. The results showed that a reminiscence bump emerged in the old-old as well as middle-aged and the young-old, furthermore the old-old recalled teenaged "self-centered" memories.

Key words: autobiographical memory, the old-old, reminiscence bump